

うに通知を出した。そのため八十余町歩の契約成立、残りは財産税に物納することに意を決定、先手先手と処理した。財産税は持てる全てが評価され、戦後処理に当てられたのではと思う。山林買収は反当り九十二円の安さ、大部分引揚げ者の入植地になった。

その上、最も重い追放処分は、世の中へ出るなどいうことで、この時は目の前がまっ暗になった。すぐ氣を取りなおして追放記念だと自分の買収された土地二町歩を買戻し開墾。精根込めて黙々一畝を耕地にして次々と増産戦士として作付けし油菜、茶、大豆、甘藷、西瓜、苺、アスパラ、栗、椎茸、実桜、蜜蜂飼育と現金収入に専念した。苺等は四時起床、八時までに六貫目収穫した。蜜蜂は何よりの収入で一升瓶百本、桜桃一日に九貫も売ったことがあった。今、乳牛を導入してより三十余年、二百坪の牛舎に育成とも五十頭余、下越地区共進会に最優秀賞を得るにいたり孫夫婦で頑張っておってくれる。

私が開墾完了、追放解除のとき、村民有志三百余人者が小柳牧衛様とともに、解除記念祝賀会を開いてく

だされたときは、一生の感激で忘れられないことであった。同じに大字区長、中学PTA会長、農協理事に推され、今は老人クラブの一員として健康に氣を付け、この年になっても何かをと、前向きにそして世情の急変を見逃すことのないよう心がけ、幸せな日常です。

白鶴舗の死闘

― 鞘は邪魔だ！白刃で突入―

滋賀県 清水 敬 一

昭和十九年五月二十七日の未明、湘桂作戦は火蓋を切った。この作戦は支那派遣遺総軍が第十一軍の九個師団を中核とする進攻部隊のほか、直接間接に五十二万の大軍を動員した国軍有史以来の大規模作戦といわれ、わが嵐兵団も甲装備作戦師団として終始最前線で激戦を続けた。

我々は洞庭湖畔の岳陽より南下し、新墻河を払暁を期し一斉に渡河し、屈原の入水で有名な汨羅の渚のあ

る汨水の地雷原を突破し、連日目の眩むような炎天下をあるいは漆黒の暗夜に篠衝く雨の中を突進して、衡陽西郊に達したのは六月二十八日であつたと記憶する。敵の方先覚司令官が死守する衡陽城は容易に投降せず、攻防戦が熾烈を極めた。

その間に日本軍を逆包囲する意図をもつて衡陽救援のため派遣された中国正規軍三個師団が宝慶方面より來襲との情報が入り、我々が所属する第一大隊（飯島部隊）はこれを阻止すべく衡陽西方面十キロの白鶴舖に布陣すべき任務を帯び、急遽転進してその地で敵に對戦し死闘を繰り返した。その時の戦闘で小生は両足に負傷した。そして我が小隊は次の賞詞を戴いた。

賞詞

嵐第六二一三部隊矢野隊清水小隊

右者白鶴舖附近ノ戦闘ニ於テ小隊長陸軍少尉清水敬一指導ノ下ニ右第一線タル矢野隊左支點ノ陣地確保並ニ「MG」高地ノ奪回攻撃ニ奮闘シ中隊ノ任務達成ヲ遺憾ナカラシメタリ

乃チ七月十二日夕我ニ二十数倍スル敵ノ総攻撃ヲ受ケ中隊陣地ノ骨幹タル「MG」高地敵ノ為奪取セラレ、ニ至ルヤ獨斷支點ニ一部ノ守兵ヲ残置シ翌十三日未明「MG」高地ノ奪回攻撃ヲ敢行シテ群ル敵中ニ突入小隊長以下殆ント戦死傷（十六名中六名戦死五名負傷）スルニ至レルモ高地ノ半部ヲ奪回確保シ猛烈ナル手榴彈戰ヲナシツ、敵トシテ退カス中隊主力ノ到着ト共ニ残レル数名ハ中隊長ト共ニ壮烈ナル突撃ヲ敢行シテ該敵ヲ撃退セリ。

右ノ行動ハ小隊長以下ノ剛毅不屈敵ヲ粉碎セスンハ止マサルノ攻撃精神ト中隊長ノ意図ニ從ヒ生死利害ヲ超越シテ全体ノ為己ヲ没スルノ鞏固ナル團結力ノ然ラシムルトコロニシテ其ノ武功拔群ナリ。

仍テ茲ニ賞詞ヲ興ヘテ之ヲ表彰ス

昭和二十年一月二十二日

嵐第六二一三部隊飯島部隊長陸軍少佐

正七位勲五等功五級 飯島克己

上記の戦闘で「MG」高地に向かつて小隊全員が隠密

裡に敵陣地斜面を匍匐前進している時、上弦の月が中天に昇ってきたので月影の方へ月影の方へと移動した。

突入するのに軍刀の鞘が邪魔になるので再び軍刀を鞘に収めることはないだろうと思いつきその場に鞘を捨て、軽機の援護射撃のもとで、投げた手榴弾の爆発と同時に全員一斉に敵陣地に突入した。

その後、探しても鞘は見付からず拔身に雑巾をまいて持ち歩いた。

白鶴舗で来援の敵阻止の任務を終えたあと、敵が包囲中の衝陽城外の敵陣地を拒送患者として暗夜に乘じて敵中突破し、野戦病院へ九死に一生を得て到着し、約一カ月入院のち再び、足を引きずりながら第一線の中隊へ復帰した。

太平洋戦争従軍記

岐阜県 増田悦三

一 召集

昭和十九年八月二十五日朝、召集令状が来ました(三十一歳)。「九月二日午前八時名古屋陸軍病院へ出頭スベシ」と記されていました。

多くの出征軍人は各地の戦場で傷つき、あるいは無言の凱旋をしている。自分も生きては帰れないと覚悟を決めた。九月二日の入隊が一日早い応召者のため八月三十一日に合同で出征軍人激励見送り式を氏神社で受けました。一旦家に帰り、最後の夜を明かし、九月一日午前、仏前に最後の別れを告げ、父、妻、兄と共に勤務先での見送り式を受けました。すぐ名古屋の自宅で壮行会の宴が行われて就寝。

二日午前七時三十分、名古屋陸軍病院正門前にて同行の父、妻、兄と開門を待つこと三十分、午前八時一